



データアクセスの多様化

システム部の若い部員の中には「自分の仕事が減る」と言った者もいた。冷静に考えると、事務処理にコンピュータを使うということは、データアクセスの多様化である。すなわち、コンピュータ化を推進するには、データに対するアクセスの多様化が必要になる。ランダムアクセスをするために必要な機器は、ディスク装置だった。

当初のシステム部員で、テープとディスクの違いをきちんと説明できている人は多くなかった。本来なら、ディスクが出来るまで、事務関係のコンピュータ開発を待つか、データのランダムアクセスを容易にする工夫をするかだったが、それに関する会話は多くなかった。

その証拠が、ディスクシステムが発表された当時のシステム部の反応である。ディスクシステムの発表に敏感に反応したのが、技術計算部門だった。

彼らはパソコンでの情報検索を開始し始めることでシステム部とのコンタクトは、極端に減ってきていた。彼らの主なニーズは、論文の検索だった。

技術資料に対するアクセスが目的で、技術資料に対する検索要求は、事務計算の資料に対する検索とは大違いだった。

では、事務計算にランダムアクセスは不要なのかである。システム部門の若い社員からの突き上げで、ユーザーのニーズを再考することになった。それまで、システム部も、ユーザー部門もしていなかったことがある。

各社とも、事業と代理店と、一対一の関係だった。そのつもりだった。つもりはいいが、そのつもりが崩れてきていた。多分、一対一の組合せが、世間と合わなくなっていた。こういう事態は、いくらプログラミングの才を持って、発見できるものではない。

A商品の扱社とB商品の扱社である。両社の関係は、例えば、当社品の扱い比率は30%とする。アップならプルし、ダウンならプッシュする。それが戦略である。ところが、誰もそれをチェックしていない。

情報集めは、専属でやらなくてもいいが、出来れば専属でしたほうがいい。意識していれば、ついでに出来るが専属の方がいい。だが、こういう態度を情報集めでの仕事をしていなかった。

その反撃とも言える動きが、パソコンユーザーから、情報集めをする企業から、出てきた。彼らは、データ集めが主業務であって、決して、プログラミングやシリアルなデータアクセスではない。

事務計算分野で、データを仕事に使っていない。極論すればそうとも言える。システム部側は、単なる情報処理工場に成り下がっていたとも言える。本人たちが気付かないだけでなく、周りで気付くべき人も気付かない。そういう不幸が重なりあった。

世の中バカにしたものでもない。関係者が気付かなければ、今まで関係なかった人が気付く。それが、システム部以外人と、データを知っている人の集団だった。

片や、パソコン坊やであり、片や、自称システム人だ。前者は、社内に溢れ、後者は、アマゾン、グーグルなどの社外者である。GAF A といった方が分かり易い。

残念なのは、気付いただけでは、新事業の展開は出来ないし、情報産業の片隅にもいられない。こうなって、筆者は、強制的に技術計算に興味を持たされた。内容ではなく、仕掛けにである。

データのランダムアクセスの可能性を感じれば、ランダムアクセスの意味を知り、ランダムアクセスの実現に必要なシステムリソースに気付く。

合わせて、情報の俯瞰力が必要である。その可能性に感度が必要である。

時代の変化

企業のシステム部門の先見性は、その企業の将来性を左右する。並みの企業は、メーカーに勧められるままにシステムリソースを導入し、終わり。そしてメーカーの思惑通りにコストだけが上がる。こういう企業をメーカーは、先見性ある企業ともてはやす。要するに、世間に吹聴し、煽り、宣伝材料として使う。

メーカーに寄せられたユーザー企業を先進ユーザーと称し、更にそれに寄せられた多くのユーザー企業が続いた。

多くの企業のシステム部門が混乱したのは、パソコンが普及し始めた時期と一致する。この当時、筆者は、システム部を離れた。社命だし、個人の都合ではない。

若いシステム部員が「仕事が減る」と、言ってきたのはこういう時期だった。だがマネージャが泣き付いてきたことはない。それほどの大混乱が認識されていない。

時代の必然としてアマゾンが出てきた。グーグルが目立ってきた。彼らの行動、事業展開が理解できたシステムマンは、どれだけ、何人いただろうか。筆者もそうで、

他人事ではない。

アマゾンはともかく、グーグルの行動は、当初は理解不能だった。莫大なコストがかかり、回収の目鼻がたたない。そんなことを、何時まで続けられるのか。何時か止むだろう、止めるだろうと思っていたが、止まる気配はなかった。

そして、今である。アマゾンは、グーグルは、大量のデータを抱え、大量の顧客を手中に収めている。

ヒトは、情報のあるところに集まる。コンピュータは情報を集め、結果として、ヒトを集める。アマゾン、グーグルは、データの内容は別にして、あの状態である。

今は、情報社会だと言う。言われて久しいが、今始まったかのようにいう。その意味は、情報を集めて、ヒトを集めることだ、とは言わない。

ヒトとコンピュータ

コンピュータがヒトにとって代わる、と騒ぎになるが、どの部分が、どのくらい代替するのかについては、誰もふれない。

物事は、ヒトがやる、コンピュータがやる、どちらでやってもいい、ことがある。分け方は、ヒトとコンピュータの能力の差にあるはずだが、その差がはっきりしないことが多い。

情報処理はヒトがする。ヒトでなければ出来ない。それはヒトがすべきである。にも拘らず、情報処理はシステムがすると平気で言うヒトがいる。

二人の靴の営業マンの話である。靴が無限に売れるか、一足も売れないか、とのレポートである。方向はどちらも正しいし、靴が売れるか売れないかはやってみなければ分からない。

どちらのレポートを採用するのか。これが情報処理である。経営判断である。決定はコンピュータでは出来ないし、してはいけない。MISは、人がするなど言った。人がしなくても出来る、といった。ウソをつけ、である。

ヒューミントは、ヒトが関わり、ファイブアイズはコンピュータがまず関わり、後でヒトが関わる。

ユーザー一人にコンピュータ一台の時代は先か、と思っていたが、何時の間にか、ユーザー一人に複数台のコンピュータ時代になった。

パソコンは文具になった。文具なら、ひとりで何台あってもいい。時代の混同は、事態を複雑にする。だが、コンピュータは文具の代わりでいいのかと思う。

複雑にしたのか、過ちを正したのか、システムを取り巻く事態は混沌としてきている。パソコンは結果だけを求め、大規模コンピュータシステムは、プロセスを重視している。両者の開発の手順も違ってきている。

違うのが、悪いというのではない。混同することが悪かった。しかも、両者の意志疎通ができない。するいい方法もない。事態は急速に変化する。

二種類のプロ

パソコン部門から、システム部門への要求が変化する。変化は現場で起こるが、対応できない。システム部の開発手順がイロハだとすれば、ユーザーの開発手順はテニオハである。狙いはひとつにしても、手順が違いすぎる。

違いを正すプロがいない、方法論がない。この状態で、何とかしろ、である。

数の多い現場社員の要求を満たすには、事態を解決できるプロが同数以上必要になる。しかし現実は無理である。時間があれば可能でも、短時間では無理だ。お互いがお互い理解できないまま、事態は進行する。

問題を簡単に整理する。コンピュータのプロは、システム設計から始める。アマは白紙のアウトプットから始める。コンピュータのプロにとって、白紙と言えども、アウトプットは、最終品である。手順を踏まないと仕事にならないプロと、いきなり白紙を持ち出すプロとがいる。

賭け麻雀をして、鹹になった検事長がいたが、その賭けの勝ち負けをプログラムしようと、挑戦したことがある。結論は無理。手作業のほうが速い、だった。

手作業とコンピュータの問題をよく表している、と感じ、今も頭から離れない。プロがもたもたしている間に、アマは自己解決を目指して、開発を進める。

問答無用である。その典型がワープロだ。普通に考えれば、開発はプロが行なう、あるいは、プロでなければ行なえないと思うが、アマが開発し、最大のユーザーはシステム部だと聞かされた。

以後の反応をみても、問題を感じていない。感じていないから手が打てない。手が打てないから傍観する。そのうち、表計算が職場を席卷した。プロの役割が疑われるという、別の結果になった。

グーグル、アマゾンの出現は、実験である。そして発展だ。彼らに、今までのシステム開発の是非は関係ない。ひたすら情報を集めた。集めた結果、ヒトが集まった。そこまで事業が持つか、が筆者の懸念だったが、見事難点もクリアした。

専門家とは何か、誰なのか。その人は何処にいるのか。かつての開発者は、今どうなっているのか。失業しているのか。自分の得意分野を見付けだしたのか。

プロの問題は、知識範囲で決まるのか。すると、その分野は役に立つのか。現状から見ると、理屈は屁理屈となり、ただ、たれていただけ、にならないか。

大型コンピュータとパソコンとは、決してライバルではないのに、ライバル視されていた時代があった。ある時まで、大型コンピュータのプロがプロで、ある時から、パソコンのプロがプロと化した。両者の立場が逆転したのだ。全員が、ワープロの出現時に、その意味を租借すべきだった。大型コンピュータの専門家が、パソコンの専門家に教えを乞うようになる、と誰が想像したのか。

(FumioTAHARA)